音のちから―中国古代の人と音楽（11）

鳥の言葉がわかる？

天理大学国際学部教授
中　純子　*Junko Naka*

動物や植物が人の音楽に反応するということを述べてきたが、逆があっても不思議ではない。人には動物の言葉がわかるのだろうか。動物のなかでも、美しい歌声を響かせる鳥類について考えてみたい。日本人は鳥の声をどう聴いているか。例えばカラスは「かあかあ」、トンビは「ぴーひょろぴーひょろ」、ハトは「ほーほー」、スズメは「ぴーちくぱーちく」、ウグイスは「ほーほけきょ」と鳴く。古代中国はどうかというと、烏（からす）は「啞啞（現代語では「やーやー」）」、鵲（かささぎ）は「喈喈（じーじー）」、水鳥は「嘎嘎（がーがー）」、鶏は「喔喔（うぉーうぉー）」と、わたしが目にする唐代以前の文献にはそのような文字で音が記されている。他にも多くの鳴き方があるだろうが、どうもその音の羅列から鳴き声の意味を把握するのは難しいように思われる。

人は、時に鳥の鳴き声に自分の想いを投影する。白居易は「慈烏夜啼」詩（『白居易集箋校』巻一）で「慈烏は其の母を失い、啞啞と哀音を吐く、昼夜　飛び去らず、年を経て　故林を守る」と、母を失った悲しみをその声に聴き取っている。それは丁度日本の童謡の「カラス何故鳴くの、カラスは山に、可愛い七つの子があるからよ」と、一方は親を想い、他方は子を想う違いはあるにせよ、類似している。しかし、これは所詮想像の世界であり、カラスの思いは本当にはわからないことであろう。

鳥は人のように意味のある言葉を発しているのだろうか。現代では、小鳥の声を「さえずり（歌）」と「地鳴き（コール）」に分けて、さえずりには一音一音に意味はないが、地鳴きはそれぞれが特定の意味をもった単語のようなものであり、小鳥も捕食者がきたときには「逃げろ」と「アラームコール」を発したり、親鳥に「餌くれコール」を発するなど、小鳥語の研究も進められている（岡ノ谷一夫「動物のおしゃべり解読学　地鳴きの中に聞こえる小鳥語の進化」『日経サイエンス』32巻（5）2002年）。さらに、中学校の国語の教科書に取り上げられた「『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ」の筆者である鈴木俊貴博士（京都大学白眉センター）は、シジュウカラの「ジャージャー」の鳴き声は「蛇」を指し、他の単語と組み合わせて仲間に危険を知らせるなど、鳥も言葉を操ることを突き止められている。

実は中国古代にも、鳥の言葉がわかる人間がいたことが記されている。『周礼』秋官の「夷隷」は鳥と話すことができる（「貉隷」は獣と話すことができる）とある。「夷隷」とは異民族出身者であり、野蛮な夷狄だからこそ鳥獣と通交できると考えられていたらしい。面白いことには、孔子の弟子のなかにも、それができる者がいて、その特殊能力によってか、孔子が自分の娘を嫁にやってもよいと考えるほどだったという。それについて、非常に詳細な考証をされて思想史的な意義にまで踏み込んで明らかにされた戸川芳郎先生の「公冶長の解鳥語について」（東京大学東洋文化研究所『東洋文化』57 1976年）がある。ここでは、そこに示された皇侃（おうがん）（488～545）の『論語集解義疏』にみえる公冶長（こうやちょう）のエピソードを要約して紹介させていただきたい。

> 孔子の弟子の公冶長は、獄舎に入れられていた。その理由は、鳥の言葉がわかったからであった。公冶長は、鳥たちが「清渓に往き、死人の肉を食（は）まん」と言っているのを耳にした。そのあと自分の息子の行方がわからなくなったと嘆く女性が現れ、公冶長は鳥たちの言葉を思い出して、女性に清渓に見に行くようにと言った。女性が行ってみると、はたして自分の息子の遺骸があった。女性は息子を殺したのは公冶長だと思った。なぜなら、そうでなければそこに遺骸があることを知るよしもなかったからである。獄舎に繋がれた公冶長は、自分は無実であり、鳥の言葉を聞いてそれを女性に告げただけだと述べた。しかし、それを信じる者はおらず、鳥の言葉を理解することが証明されなければ死罪ということであった。獄舎に繋がれて60日たったとき、雀が獄の柵上で騒がしく鳴くのを聞いて、公冶長はニッコリと笑った。なぜなら、雀たちが「白蓮水のほとりで穀物をつんだ車がひっくり返って立ち往生している。みんなで行ってそれを啄ばもう」と言っていたからである。村長が人をやって確かめさせたところ、その通りであった。でも誰かが公冶長に告げたのであろうと、許してもらえなかった。しばらくたって、公冶長が猪や燕の言葉をも理解することがわかると、やっと許された。

公冶長が鳥の言葉を理解したという話は、実は孔子の時代から伝えられていたわけではない。戸川論文によれば、「おそらく魏晋の交からのち、ここに見られるような、公冶長に関する説話が語られるようになった」のである。「人類と異類の鳥獣とのあいだに六情において通交しうる、とする考えがその根底にあり、すぐれた知力を保つ人士にはそれが可能であったとする」と論じられている。人間が異類の言葉を理解できるという説話がこのころから現れ、当時の人々はその能力を高く評価したのである。現代で考えればドリトル先生のような夢物語なのであろう。しかしそれは信じられていたようである。

獣の言うことを理解する人間についても、古代に記録がある。『春秋左氏伝』僖公二十九年（B.C.631）の条に「介氏の国の葛盧という者が牛が鳴くのを聞いて『この牛は小牛を三頭産んだが、みな犠牲に用いられた。鳴き声でそう言っています』というので、調べるとその通りであった（介葛盧聞牛鳴、曰是生三犠、皆用之矣。其音云、問之而信）」とみえる。牛の鳴き声が悲し気であったので、そのように想像したとも考えられそうである。しかし魏晋の交の人である杜預（222～284）は、これに「異類の情に通交するものも或（あ）る」と注釈をつけている。どうも当時はそれができることが広く信じられていたようだ。鳥獣の声を基にした『鳥情雑占禽獣語』『鳥情占』『鳥情逆占』などの占いの書が『隋書』経籍志に著録されている。鳥や獣と話すというより、その声から感じ取れることがあったというのだろうか。

しかしながら、前回も述べた草が踊ることを合理的に理解しようとした宋代の人は、こうした異類との通交についても正常な感覚では信じられない、と否定的であった。筆者は、戸川先生が授業で宋代以降の人間の感覚はなんとか理解できると言っておられたことを思い出す。それは空想や感覚より常識や理論が先行する現代人に繋がる人間のありかたなのかもしれない。それでも、動物や虫や草が人間の音楽を感知したことを考えると、人が異類と通交できると信じた古代の人の感覚の方に共感したくなろうというものである。